

2026 年 BSL 放射線治療科
オハイオ州立大学 留学報告
211041 酒井幹太



目次

1. 留学の概要
2. 実習内容
3. 留学中の生活
4. 留学を終えて
5. 謝辞

1. 留学の概要

福島県立医科大学 6 年の酒井幹太と申します。

私は放射線治療科の実習の中でオハイオ州立大学への留学の機会をいただきました。

その留学の概要について以下に示します。

留学先：オハイオ州立大学

期間：2026/6/8-2026/6/12

留学の目的：

- ・4 年次の放射線腫瘍学講座の講義で、オハイオ州立大学でのアメリカ最大規模の放射線治療について鈴木義行教授からご教示いただき、実際に現地へ赴き学びたいと思ったため。
- ・学生のうちに海外の医療に触れ、将来のキャリア形成に活かすとともに、海外の医療機関での学びを通して、自国の医療に対する理解も深めたいと思ったため。

2. 実習内容

月曜日から金曜日にかけて、放射線治療に関する施設や外来の見学をさせていただきました。各曜日の実習内容について以下に示します。

・月曜日

午前は線量計算士の先生からアメリカの放射線治療に関する基礎的な講義をしていただきました。アメリカの放射線治療は主に放射線腫瘍医、看護師、医学物理士、線量計算士（ドシメトリスト）、診療放射線技師から構成されます。特に医師、看護師以外の 3 職種は日本よりも業務ごとに細分化されており、治療計画の立案（ドシメトリスト）、治療計画の最適化・品質管理及び研究開発（医学物理士）、実際の照射、検査（診療放射線技師）をそれぞれ別の職種が担うことで、患者さんにとってより専門的で精度の高い治療を提供することができます。講義の中で研究段階の放射線技術についてもご教授いただき、AI による治療計画の生成、PET シグナルでがんの生物学的活動（代謝・増殖）を直接追跡し、照射する生物学的ガイド放射線治療についても学ぶことができました。

午後は実際に患者さんに使用する放射線治療施設を見学させていただき、リニアックなどの照射装置や治療計画システムについて学びました。1 日を通して、アメリカで放射線治療における一連の流れを学ぶことができ、その規模の大きさと日本との治療システムの違いについて理解を深めることができました。

・火曜日

火曜日は実際に放射線腫瘍科の医師の下で外来に参加させていただきました。朝はカンファランスを行い多職種間の情報共有から始まりました。カンファランスは治療に関わるほ

ば全ての職種が参加し活発に意見交換がされており、日本とのシステムの違いを感じました。また、実際の外来では医師が患者さんの部屋に直接出向き、診察や問診をする形式となっていました。患者さんとのコミュニケーションにおいても患者さんが納得し自身の悩みを解消するまで医師が真摯に向き合い、十分な時間を設けて診察にあたる姿が大変印象的でした。

留学したオハイオ州立大学の放射線腫瘍科は医師だけで約 50 名が在籍しており、各医師が自分の専門臓器をはじめとした領域の棲み分けが細くくなされています。そのため担当する患者さんに関しても自ずと細分化され、結果的に精度の高い医療を患者さん一人一人に提供できていると感じました。一方で日本と保険制度が異なっていることから、全米で同等水準の医療をすべての人が享受できるかは定かではなく、今回の訪れた病院を通して、この病院で医療を受けることができるのは社会的にどれほどの階級や所得が必要か、といった患者視点で国の医療体制を考えるきっかけになったことも海外の外来を見学することで得られた気づきであると感じています。

・水曜日

午前には重粒子線治療センターを見学させていただきました。重粒子線治療に関して実際の機器の見学を交えながら解説いただき、日本との治療システムの違いと共通点について、医学物理士の先生とのディベートを通して理解を深めることができました。

午後は線量計算士の先生から臨床における実際の放射線治療計画について講義いただきました。日本の放射線治療においては主に医師が計画を立て、技師とともに治療にあたるのが一般的ですが、アメリカでは治療計画を立案する専門の職種が存在し、マージンの設定、危険臓器への配慮など、どの事項においても精通されている印象を受け、医大の放射線治療科で学んだことをさらに深めることできたと感じています。

・木曜日

福島医大放射線治療科から研究留学されている先生のラボにお招きいただき、電子線治療施設の見学と現在されている研究についてご教授いただきました。特に研究内容では超高線量率を短時間で照射することで、腫瘍への効果を保ちながら正常組織の障害を減らす可能性がある FLASH 治療について深く学ぶことができました。さらに日本で大学院生として臨床、研究を並行し、博士取得や海外留学といった経験をキャリアの中で実践されている先生のお話を伺うことができ、将来の自分のキャリアについて視野を広くもって考えるきっかけになったと感じました。

・金曜日

この日は放射線治療に関する実習はなく、大学内の施設を見学させていただきました。自大学のフットボールスタジアムや大学内に巨大な博物館があったりと、その規模の大きさに

驚きました。今回留学したコロンバスという街は、街自体がオハイオ州立大学を中心とし、そこで働く人や学生が多く住む場所であることから、大学が学術や医療機関としてだけでなく文化的な面で大きな役割を担う存在であると実感しました。

3. 留学中の生活

オハイオ州は同時期の日本よりも気温が高く、日中は 30℃を超える日が多かったです。また日没がとても遅く、22 時頃やっと外が暗くなるほどでした。大学周辺は治安は良く、大きなトラブルに遭うこともなく過ごすことができました。

病院実習のない日は、現地の放射線治療科の先生のお宅に招いていただき、カヤックをさせていただいたり、研究留学されている先生のお宅でバーベキューをさせていただきました。他にも休日は美術館を訪れたり、現地の人たちとワールドカップを観戦したりと異文化に触れる経験を沢山することができました。

普段の生活は留学した 6 人で Airbnb を利用し共同生活を行いました。普段大学で関わることが少ない人も多くいましたが、留学を通じて切磋琢磨し合いながら、慣れない環境でお互いに刺激を受け成長できたように感じています。

4. 留学を終えて

今回の留学を通して、アメリカの放射線治療に関して臨床と研究の両方の分野において非常に沢山のことを吸収できたと感じています。

また、アメリカの医療機関で実習をするという経験から、臨床、医療制度、語学など様々な分野においてショックを受け、その環境に適応することを強いられたことが留学における最大の経験であったと感じます。

今回の留学は 6 人でしたが、英語に精通している人は誰もおらず、日常会話すらままならない状態で実習がスタートしました。そのような中でも、分からないことはすぐ調べず、人に聞いて解決をし、実習においては講義中絶えず質問し、医師や患者とも覚えた専門用語を繋げ積極的に会話する、といったことを毎日繰り返すことで後半は臆せずコミュニケーションをとれるまでに順応できたように感じました。一貫して主体性をもち行動したことが海外慣れしていない自分たちにとって今後の自信につながる糧になったのではないかと思います。

一方でそれ以上に、自分の能力の低さを痛感する場面も多く、将来医師としてこのような海外の先進的な医療機関で臨床や研究に携わることをご縁をいただけるように、医療知識、臨床経験、語学能力など必要な沢山のスキルを日々研鑽していかなくてはならないと感じました。今回の経験を今後の学習や医師としての臨床および研究に活かすとともに、福島から国際的な医療の発展に貢献できる人材となれるよう努力していきたいと思っています。

5. 謝辞

この度、オハイオ州立大学での貴重な学びの機会をいただき、多くの方々のご支援とご協力を賜りました。

福島県立医科大学

放射線腫瘍学講座 鈴木義行教授
梅宮和真先生
福島安瑞美先生

企画財務課 増井奈津美様

オハイオ州立大学

放射線腫瘍科 Jacob Eckstein 先生
John Grecula 先生
Eric Miller 先生

Gill Lexi 様
眞船翔先生
山口久志先生

心より感謝申し上げます。